

# 仙台P S操業差止訴訟・意見陳述書

平成 29 年 12 月 13 日

原告 千 葉 永 一

私は、仙台パワーステーションから西南方向に約 1.5 km離れた白鳥●●●に、昭和 58 年から住んでいます。昭和 21 年生まれで、現在 71 歳です。原告団の副団長を務めております。

自宅には妻と長女夫婦、2 歳半の孫と一緒に住んでいます。仙台パワーステーションから 5km 圏内の●●には、三女夫婦と小学校 3 年、1 歳の孫が住んでいます。

震災後は、町内会の役員として、地域の方達と協力して、子どもや孫たちが安心して暮らせる、災害に強い地域づくりに努めてきました。子どもや孫たちに良い環境を残してやるのが私達の責任だと思っています。

震災の翌年、平成 24 年 11 月末からは、「蒲生のまちづくりを考える会」にもかかわるようになり、現在は、「蒲生のまちづくりを考える会」の事務局長でもあります。

震災で命からがら避難し、地域の復興を願い、微力ながら、白鳥地区や蒲生北部地区の再建のために努力してきた自分にとって、仙台パワーステーションが建設される、続いて四国電力などによる仙台高松発電所も計画されている、木質バイオマスとはいえレノバ社の火力発電所が計画されているという事態は、大変ショックです。被災地になぜ、次々とこんなものが来るのか、憤りを感じています。被災者を追い打ちする、弱い者いじめのようにも感じられてなりません。

とくに仙台パワーステーションは、出力 500kW というわずかの差で環境アセスを逃れ、私たちが何度要請しても地元住民への説明会に応じず、建設工事がほぼ完了する今年 3 月 8 日になって、ようやく渋々開いたほどです。やり方がどぎつい、誰が見ても、あまりにも大人げないと思います。

6 月 12 日の試運転開始以来、ほとんど毎日のように仙台パワーステーションの煙突からもくもくとした煙が見えます。とくに 10 月 1 日の営業運転開始以降は、昔のだるまストーブのような、石炭の臭いが気になるという人が増えています。12 月 3 日のスーパームーンの日は温度も湿度も高かったのですが、この日、石炭の臭いがしたという人が少なくありません。

多くの人が犠牲になった地域に、公害をもたらす怖れのある企業が居座るこ

とは口惜しくてなりません。今年の4月2日から始まった「杜の都を「石炭の都」にするな 緊急署名」で、私は、町内会の方々、学校時代のツテ、工場勤務時代のツテなど、あらゆるツテをたどって、2ヶ月間で1人で1300筆以上の署名を集めました。子どもや孫達の健康を守りたいという思いで必死にがんばりました。近所の人もがんばってくれました。

仙台パワーステーションの運転を何とか止めたいという願いから、妻ともども今回の裁判の原告に加わりました。私の町内会では、ほかに3人の方が原告に加わっています。

平成23年3月11日の大震災の折には、自宅におりました。ラジオを聞いていましたが、10メートルの津波が来るといふ津波警報がラジオで流されたので、妻は母親と近所の人1人を乗せて車で西へ避難、私は一時避難所に指定されていた高砂中学に徒歩で避難しました。

蒲生の3箇所から火の手があがるのを中学校の屋上から見ていました。いつもは穏やかな七北田川が不気味に薄黒い色で濁流になっていたのが忘れられません。高砂中学には10日間避難していました。妻と母親は、4月3日頃まで高砂中学に避難していました。中学校では、避難している地域の人たちのお世話を率先して行いました。

白鳥地区では、最大1.8メートルの津波が来ました。避難所から戻ると、私の家では、床上60センチまで浸水し、大きな冷蔵庫が引き波で倒れていました。白鳥地区では津波で流された家はありませんが、浸水した家は多かったです。

震災の翌年、平成24年11月末から、「蒲生の街づくりを考える会」にかかわるようになりました。自分たちの白鳥地区が助かったのは、より海に近い蒲生北部が楯のような役割をはたしてくれたからだと思ったからです。

仙台パワーステーションが立地する蒲生北部地区には震災前、約1200世帯が住んでいました。アパートも多かったのです。8~10mの津波で、約6割強の家が流され、蒲生北部地区の4町内で、行方不明者を含め、地元住民151名が亡くなりました。そのほか、企業の従業員やたまたま蒲生干潟や海岸をおとずれていた人など、約157名が亡くなっています。合計で、300名を超える方がこの地域で亡くなりました。災害危険区域に指定されたために、現在、蒲生北部地区に残っているのは、残念ながら、8世帯とアパートの住民10世帯のみです。

定年退職した翌年から、町内会の役員を今年の1月まで10年続けてきました。

温暖化問題への関心があったので、自分でも出来ることはやりたいと、震災の2年前に太陽光パネルを借金して設置しました。

震災後は、「蒲生のまちづくりを考える会」の活動を通じて、平成 25 年 3 月に「蒲生を守る会」の方達と知り合うようになり、蒲生干潟の清掃活動や野鳥の観察会にも、ほぼ毎回出ています。中野小学校の児童がよく来ています。小学校 3 年の孫も興味を持つようになって、カニをつかまえて誉められて、得意になっていました。子どもの成長にとっても、身近な場所での自然観察の機会はとても重要だと実感しています。

仙台港で石炭火力発電所の建設が既に始まっていること、石炭火力発電所の問題点を一緒に考え、説明会の開催を求める活動が始まっているということも、「蒲生を守る会」の方達から教えられました。

仙台パワーステーション株式会社は、着工にあたって近隣の企業には挨拶したそうですが、地元の町内会には一切連絡がありませんでした。県への情報開示請求で出て来た文書によれば、仙台パワーステーション株式会社や宮城県が一番心配していたのは、仙台港から積み出される自動車の新車に石炭のススが付くのではないかと、ということだったそうです。県の指導は、関連する自動車会社に事前に丁寧に説明しておくようにということだったそうです。

住民の健康よりも、新車に付く石炭のススの方を心配する。こんな会社や自治体のあり方に、私は強い憤りを感じます。

高校を卒業した年から、現在はキリンビール仙台工場の隣にある東洋製罐仙台工場で 60 歳の定年まで 42 年間働きました。工場勤務の時代も、町内会やまちづくりの活動でも、私は、現場をよく見る、現場の声をよく聞く、現場で考えることをモットーにしてきました。

裁判長にお願いがあります。「裁判官による現場検証」というのがあるそうですが、裁判官にも是非、仙台パワーステーションと、私たちが住んでいるその近隣地域を現場検証していただきたいと思います。

以上で私の意見陳述を終わります。